

真紅のバラを37本

◎37本のバラです……………

パパの人生です。きれいでしょう。立派でしょう、私の夫なのです。見て下さい。私は37本の

バラの束を、空に掲げるようにして、ビー

トルズの曲「ヘイ、ジュード」を口

ずきみながら、病室に帰ってゆ

きました。「パパ、穂世をお嫁さ

んにしてくれてありがとう」静

かに、

Yasuyo TAKAHASHI

高橋穂世

二人だけの時が
流れてゆきます。

新声社



真紅のバラを37本

◎37本のバラです……………

パパの人生です。まわってしまふ。立派なよう。

私の夫なのです。見てください。私は37本の

バラの束を、空に掲げようとして、ビー

トルズの曲へ、ジューズを口

ずさみながら、病室に帰ってくる

きました。「パパ、お世をお願さ

んにしてくれてありがと」静

かに……………

………

………

………

………

………

………

………

………

………

………

「一人だけの時が

流れてゆきます。

………

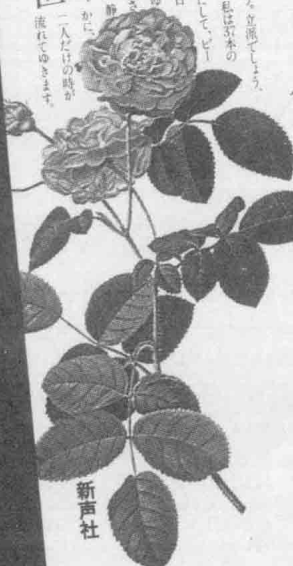
………

………

………

………

………



新声社

高橋穂世

高橋穩世（たかはし・やすよ）

一九五一年、山口県生まれ。淑徳大学社会福祉学部卒。

東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了。

山口福祉専門学校教官、ファミリーエージェンシー（慢性疾患

児とその家族への支援機関）事務局長・カウンセラー。

現在山口市在住。

真紅のバラを37本

定価二〇〇九円（本体九八〇円）

一九八三年九月十七日初版発行

一九九二年四月八日 二十七刷発行

著者 高橋穩世

装幀者 杉浦康平＋鈴木一誌

発行人 加藤 博

発行所 新声社 〒一〇一 東京都千代田区内神田一―一五―一五 柴田ビル

電話 〇三（三二九三）九三二一―四

振替 東京五―九八四二〇 印刷所 壮光舎印刷 東京アート印刷

落丁・乱丁はおとりかえいたします。

真紅のバラを
37本



装帧：杉浦康平
鈴木一誌

真紅のバラを37本
目次

むしろプロローグ・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

愛だけが輝いていた・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

小さな出会いが・・・・・・15／二人だけの時18／お金に縁なくとも21

俊樹の誕生23／何もかも充実して25

街路灯の明かりの下で・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

高まる不安31／どうしていいか分からない34／街路灯の明かりの下で37

癌？なぜ39／悪夢のような三が日42／小児科病棟48

誕生日のプレゼント49／優しい言葉が欲しい51／トッチちゃんが死んでしまう53

生きている！56／賑やかな引越しのように61

パパのいる東京へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

この子は天才バカボン！65／恩師の死68／父親のない子にするな70

帰ってきてよかった74／勢いよく鯉のぼりのように75／いつも三人が一緒77／

パパの給料日 80 / トッチちゃん元気で三歳 82

カメラのシャッターが切れない…………… 85

主治医からの電話 87 / 心はうつろ 90 / シャッターが切れない 91

パパ話があるの 93 / ともに闘ってこそ 95

そこは戦場だった…………… 99

男の子らしく 101 / 戦士のごとく 103 / パパの手のぬくもり 106

長い長い一日 108 / トッチちゃんの入園式 111 / トッチちゃんも再発? 115

パパの真情ママの願い 117 / せまられた決断 122 / じっと待つ部屋 125

一緒に一分でも多く 128 / 絆 138 / 故郷の祭りのあとは 143

時間が惜しい 146 / 電車に乗せてやりたい 151 / 人のぬくもりの中で 153

陽はまた昇る…………… 157

走れるのは私だけ 159 / 願いはひとつ、鬼は外 164 / ひそかな侵食 166

チューリップの中の父子 169 / 深いつながり 171 / 穩世を守って下さい 174

俊樹のそばにいたい 177 / たった一言が…………… 179 / 精一杯やろうな 184

陽はまた昇る 190／悔いない日々を 194／輝いて見えるよ パパ 198

一滴の露のように…………… 203

トッチちゃんの思いやり 205／頂上がたとえ死であっても 207／一本の注射よりも 209
パパとの最後の会話 214／トッチちゃんは新しい世界に 217／一滴の露のように 220
パパが立てない 226

真紅のバラを 37本…………… 229

再び太陽を 231／元日に意識不明 232／秀明のことを頼む 235

出来るなら代わってやりたい 236／今日はとても楽みたい 242／教え子たちよ 244

真紅のバラを 37本 245／もう逃げたりはしない 247／勝利者として 249

花みずきを…………… 251

最高の人 253／霊安室にて 254／通夜 256

誇り高き戦士よ 257／花みずきを 262／感謝を込めて「ありがとう」 265

パパへ 永遠の愛をこめて…………… 267

むしろ。プロローグ



菜の花を目にすると（あつ、春がきたな）、私はいつもそう思う。

でも、春は私にとって、常に修羅場でした。

中央線の中野駅と新宿駅との中間に、燃えるような黄色の菜の花の群れ咲く土手が目に映ります。電車の窓からこの菜の花をみて、一瞬心は安らぐのですが、すぐ現実に取り戻されるのです。

（春が来なければいいのに。これまで、春は一度だっていいことはなかった）

その時もやはり春でした。

昭和五十五年の春、御茶ノ水の順天堂大学病院に入院していたパパが無事退院。ほっとする間もなく、退院二週間後に主治医から電話がありました。

「くわしいことは、電話では話せませんが、御主人は悪性です。一度、内緒で病院に来て下さい」

首にグリグリができ、パパはその手術のために入院していたのです。手術後の経過もよく、パパはいつもの元気を取り戻しています。なのに……。悪性ってどういうこと？ 癌？ いやだ。信じられない。こんなに元気なのに……。その夜は一睡もできませんでした。

翌日、三歳のトツちゃんの手を引いて、西荻窪の駅から黄色い電車に乗りしました。

「トツちゃん、パパには内緒でいい所に行こう」

「帰ったら、パパに教えてあげるの？」

「秘密だよ」

それにしても、なんとしても信じたくないことでした。

（悪性ということは、つまり癌。やっと、トツちゃんが元気になり、普通の子と変わらないくらい腕白になっているのに）

（パパだって、手術したとはいっても元気なのに。どうして、どうしてパパまでが癌にならなければならないの）

トツちゃんのやわらかい手をにぎりながら、「パパまでが癌なんて」、予想もしなかった事態を確かめに行く私は、何度も何度も同じ言葉を心の中で繰り返すばかりでした。

順天堂大学病院の主治医のお話はやはり癌の宣告でした。

病院を出てからは、今日病院に出かけたことを、どうやってパパに隠すかということで、私の頭の中は一杯でした。

電車の中で、私は背中のトツちゃんにさり気なく話しかけました。

「トツちゃん、今日、病院に来たこと、絶対パパに言ってはダメよ」

「ママ、どうして？」

窓に顔を向けていたトツちゃんが、驚いたように、私の顔をじっと見つめています。

「あのね、パパのお病氣、とても大きな病氣だったの。それがパパに分かると、またパパ病院に入院してしまうよ。トツちゃんとママ二人きりになってしまうよ。イヤでしょう」

「うん」

「黙っていられるでしょう」

「だったら、朝、美祢^{みね}のじいちゃんから電話があつたのは話していい？」

「いいよ」

「パパの病氣なおるの？」

「トツちゃんが黙っていたら、すぐなおるよ」

私が暗い顔をしていたら、トツちゃんはすぐ「パパ、本当になおるの？」と悟ってしまいます。俊樹は敏感な子でした。

新宿で電車を降り、デパートの食堂に入りました。つとめて明るく振舞おうとするのですが、主治医の言葉が消しても消しても脳裏に浮かび、渦巻いています。食事のどを通りません。箸をつける気にもなりません。

「ママ、どうして食べないの？ トツちゃん、これも食べていい？」

何も知らないトツちゃんは、お刺身をおいしそうに食べています。

（こんなことって、あるだろうか）

想像さえ出来ないことです。一生の伴侶と定めた夫は、一八〇センチのたくましい肉体に、若さをみなぎらせているのです。

私たちの出会い、結婚生活の中には、このような悪夢を予感させるものは、ただのかけらも無かったのです。

愛だけが輝いていた



